

---

# 鬼とユビキリ

三代渡吉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

鬼とユビキリ

### 【Nコード】

N7937E

### 【作者名】

三代渡吉

### 【あらすじ】

少年は生き返った。鬼と「将来二十歳になった娘を鬼に食わせる」という契約を交わして。

気がつくと、少年は蘇っていた。

蘇る、というのは不思議な感覚であった。

自分の身体に戻ってきたはずなのに、別人の身体に入り込んだような、酷く着心地の悪い感じがして、少年は顔をしかめた。

自らの服が汚れ、仕方なく他人の服を借りて着た時の、鳥肌が立つような感じに似ている。

「本当に蘇ったのか」

実感が沸かない少年は、自分を近くにあったカーブミラーに映してみる。

鏡に映った姿は、当然歪んでいたが、少なくとも自分が自分であることはよくわかった。

「俺は、かねさわなりと金沢成琴……覚えてるぞ」

それから成琴は、身体のおちろちらを動かしてみた。

四肢は勿論、首を一回転させた後、目薬を注した時のように瞬きをして、鼻もヒクヒクと動かしてみた。匂いも嗅いだ。

思いつく限り自分の意思で動かせるところを動かした後、ようやく成琴は不安を吐き出すように息を吐いた。

「……寒い」

ヒューツと流れた木枯らしが、成琴の身体を容赦なく突いた。

彼は辺りを見渡してみた。そういえば自分は今どこにいるのか確かめたかった。

もしかしたら、今自分がいるのは、あの世かもしれないのだからそこは、名も無い山に開かれた、隣町までに続いている車道だった。

所々カーブ付近に古いガードレールやミラーが設置されたそこは、まさしく現実の世界である。が、彼にはそうは思えなかった。

自分が自分でない感覚のせいということもあるのであろう。今の

彼は、この自分の着心地の悪さを早くなんとかしたい気分で一杯だった。

「そもそも、俺はどうして死んだんだ？ 何故蘇っているんだ？」  
蘇ったショックで混乱した記憶を、成琴は回想して整理することにした。

成琴は、社長子息であるからして、送り迎えは当たり前な生活も出来るほど裕福な家庭で育った。

だが、それを彼は好まなかった。

金銭主義の父親の考え方が、反吐が出るほど嫌いだったからである。

もつとも、彼もまたこの世は基本的に金で成立しているという持論を持つ男だった。

夢が無いと思わず自らの口から出るほどの、現実主義者だった彼と父親の間の差異は、とても些細なであった。

父は、息子の成琴に様々な恵みを与えていたが、その不器用かつ歪んだ愛情は、本人に伝わることはなかった。

今日も成琴は、友達と一緒に隣町まで遠出していた。少々古い車に乗って。

兄のものを借りたという免許も持っていない友人の運転だったが、こんなことはかれこれ五十回目を超えていたので、もう手馴れたものだった。

気が済むまで遊んで、遊びまくったあと、重大な失態が発覚した。友人が酒を飲んでしまったのだ。

飲酒運転にうるさいこのご時世に、車で帰って警察に捕まろうものなら面倒なことになると、その日成琴以外の友人達は、隣町のホテルで夜を過ごすこととなった。

これからは、隣町に住む遊び仲間と一緒に、知り合った女達と朝まで好き放題やるのだというが、成琴は朝まで元気に騒ぐことに、何ら魅力はもてなかった。

人間が本当に野性の虜となつた瞬間を見るのが、成琴は溜まらなく寒気がするのであった。

見事に電車が繋がっていない隣町から、自宅のある町に戻るには、徒歩だとなんと三時間かかった。

しかも、唯一まともに繋がっているのはこの山道だけ。

一人で心細いところはあるが、そんな事件になるようなことは起こらないだろうと思っていた。

コートを着た男に、額をナイフで刺されるまでは。

「起きろ」

そう呼ばれて、成琴は目を覚ました。

真つ暗で何も無い、何も見えない場所で目が覚めたことで、自分は死んだんだなということ成琴はすぐ理解した。

額に何かが刺さっているような感触が、先程の事件のことが夢でなかったことを思い知らせる。

だが、よく見ると自分の身体はハッキリと見える。なるほど、ここは暗いのではなく、全てが黒く塗りつぶされた世界だったのだ。

きつとこれは、死者の世界にでも辿りついたのだらうと、フラフラしながら起き上がった成琴の前に立っていたのは、想像を絶する存在であった。

「金は集まりそうだけど、女に縁遠い顔してるな、お前」

体格の良い長身の男がしれつと話しかけた。

だが、相手は普通の間人では……否、生き物ではなかった。

全身は真つ赤だし、身長自体もビックリ人間としてテレビで紹介されてもおかしくないほどの長身だ。

二メートルは軽く越しているだらうか？ 流石に三メートルはないだらうが、それでも成琴を軽く見下ろせるほど高い。

今にも破裂しそうな心臓の如く、脈打っている屈強な筋肉と、細かく切り刻まれた藁のような髪の毛が、その異質さを際立てていた。瞳孔の存在しない、黄色く鋭い目が、成琴を捉えていた。

赤い化け物と対峙しているだけで、生きている心地がしない。成琴は、自分があのだにやってきたことを、改めて理解した。

化け物が、あるのかどうかわからない地面をのしと歩いて近づいてきた。すると、成琴にむわつとした熱気が襲い掛かってきた。どこまでも尋常な存在じゃない。成琴はそれを正しく肌で感じ取っていた。

「お前は、生き返りたくないか」

「は？」

「おや、死にたくないのではないか？　そもそも生物とは生に執着するはずだ。執着しないのは妖怪ぐらいなんだから」

「……」

成琴は、すぐには答えなかった。というより、気が動転していたのだ。

いつまでも馬鹿みたいに目を開きっぱなしにする彼を見ていてイライラしてきたのか、赤い化け物はまた催促を始めた。

「このまま死ぬか、蘇って現世に戻るか。聞くまでも無いだろうが、選べ」

イライラしているのは成琴にもわかったので、どうにか話を繋げようとして、彼は口を怖々と開く。

「利益と、損失を教えて欲しい」

ついて出た言葉が、そんな夢のない台詞だった。

夢の中でも自分は現実を重視するのかと、成琴は自分に呆れた。

だが、一方で赤い化け物は嬉しそうに返答してきた。

「なるほど、なかなか慎重な奴だ。お前は非常に有益な人間だと思うぞ」

そう言っ腕を組んだ赤い化け物は、座り込んでいた成琴の肩を両手で掴んで立たせると、早速説明を始めた。

掴まれた肩は、まるで鉄板でも押し付けられたように熱かったが、なんと服は焼けていなかった。

「利益は何度も言うが、また現世で暮らせること。人間は常にそれ

を望んでいるだろう？ さて、損失は……」

と言いかけて、急に視線を反らした赤い化け物を、成琴はうるさく急かした。

すると、わかったわかったと頭をかいたあとで、赤い化け物は一つ咳をして喉を整えた後で、話を進めた。

「損は、お前が結婚して娘が生まれ、その娘が二〇になったら、俺の腹に収めるということだ」

「それってつまり、食わせろってこと……？」

「噛み砕いて言う必要がなかったな」

ハッハッハと、赤い化け物は豪快に笑った。

「俺は人間を食ったほうが強くなれるし、妖力をちゃんと定期的に補充しなくちゃならない。そのためには人食いが一番手っ取り早いのだ」

「妖怪つてのは死なないんじゃないのか？」

「死にはしないが、力無くなれば消えることはある。消えればその存在そのものが皆から忘れられてしまふ。悲しいよそんなのは」

「人よりエグイんだな……そっちの世界事情って」

「そんなことはどうでもいい！俺の提案を受けるのか、突っぱねるのか、どっちだ！」

和やかに会話していたところで、いきなり恐ろしい形相を向けられた成琴は、少し怯みつつも、首を小刻みに縦へ振った。

「お願いします。是非お願いします」

「最初からそう言えば良かったのだ。約束を忘れるなよ？」

彼はそう言うと、小指を成琴に出してきた。

何のことかわからず、ぼーっとしていた成琴だったが、化け物の太い小指で彼のか細い小指を突付かれて、ようやく理解した。指切りを催促しているのであろう。

指切りをしようと対峙した化け物の指は、燃えていた。

焼け爛れているわけではない、炎が所々に纏われているのである。こんなものと指切りしたら、こっちの小指が丸焼けになってしまう

のではないか。

「ユビキリゲンマン。嘘ついたら、オマエのカラダを食ーべる」  
ところが、指切りしても、痛くも痒くも熱くもなかった。

「指キツタ」

むしろ、身体がどんどん重くなつて、意識がハッキリしていく感覚がしたのだ。

途端に小指が炎の渦に飲まれたかと思うと、眩く光り初めて、黒かった世界を段々と打ち壊していった。元の世界に戻ろうとし始めているのである。

意識が元に戻る。そう確信した成琴は、不安定な意識の中で、赤い化け物に対して質問した。

「娘が生まれるとは限らない。その場合はどうなるんだ？」

「安心しろ。一人は必ず生まれることになってる。お前のような女受けしない顔でも、それなりの嫁さんは来るだろう」

「そうなのか……」

そんな根拠の無い未来を告げられて、成琴は妙に納得していた。説得力は十分では無かったが、今の成琴にとっては、不十分でもなかった。

「約束を破つて食わせないといった場合は、お前が食われるからな。だから何度も言うけど、約束は覚えておけよ」

わかったと承諾した途端、赤い化け物の姿が消えゆく蜃気楼のように歪み始めて、彼はもう一つ、最後の質問をした。

「お前は、結局何者なんだ？」

一番大事な質問であつた。

その重要度とは関係なく、赤い化け物はとても簡潔に答えた。  
「俺あ、鬼だよ」

元に戻った彼は、自分の身体に違和感を感じつつも、その身体で生活を続けた。

が、そんな奇妙な感覚を抱いていたのも最初だけで、すぐに元々



の普通に生活まで戻ることが出来た。

そして同時に、鬼との約束や、自分に起こった奇妙な体験のこと  
も、記憶の片隅に追いやられていった。

それから三十年後……。

たまに老眼鏡を使わなくてはならないほどに年老いた金沢成琴は、  
父親の事業を引き継いで大成功を収めていた。

先代よりもずっと頭の良い稼ぎ方だと社内の古株からも賞賛され  
るほどの手腕で、業界で特に注目される実業家にまで上り詰めたの  
である。

その間、容姿も性格も悪くない、詰まるところ当たり障りの無い  
性格の妻と結婚を果たした彼は、男女一人ずつの子どもも儲けてい  
た。

彼の人生は、正に明るかった。

そして、その明るさはますます増そうとしている。長女が本日、  
二十歳の誕生日を迎えようとしていたのだ。

嬉しい反面で、いよいよ婿に行ってしまうとなると寂しくなるな  
と彼は薄くなり始めた頭を掻きながら、涙を拭った。

コンコン……。

社長室を誰かがノックした。

長男であろうか？ 跡を継ぐことを既に決めていた彼の息子は、  
父の経営の手腕をなるだけそのまま引き継ぐため、自主的に勉強し  
たいと、よくここへ訪問していた。

自分の学生時代とはまるで違い、勤勉勤労かつ、そして誠実な長  
男は付き合いづらかったが、誇りに思われていることに悪い気分は  
しなかった。

だから、今日も成琴は普通に扉を開けたのである。  
その相手が鬼だとも知らず。

「よつつ」

「ひゃあっ！」

素っ頓狂な悲鳴をあげ、成琴は尻餅をついた。

「なんだ。俺のことを忘れたのか」

「め、めめめめ滅相も無い」

昔より度胸のなくなっただ自分の根気の無さに呆れつつ、成琴は絨毯の敷き詰められた部屋に正座した。

「ちゃんと覚えてるみたいだな。今まで忘れていたとしても、それは感心だ」

「それはそれは、光栄です。ありがとうございます」

床にへばり付き、ほとんど土下座に近い位置で頭を下げた成琴に、今は社長としてのプライドは無かった。

鬼が鬼なりに再会を勝手に楽しんだ後、一通り部屋の中に置いてある骨董品の皿や壺を好きなだけいじり倒し始めた。

そしてそれに飽きると、最後には来客用の椅子にどっしりと座り込んだ

椅子が燃えやしないかと心配したが、どうやら熱くてもそういった弊害までは起こらないのか、特に問題が起こった様子はなかった。いつもは秘書にやらせているお茶出しを自らやってみせながら、

成琴は反対側のソファに座って、鬼と対峙した。

鬼は、瞳孔がないうえに身体が赤いから怖く見えるのであり、こうして対峙していると、かなり気さくな性格らしかった。

ジョークを交えながら、近況の話を互いにしあう様子は、たったあれだけの会話しかしていない二人なのにも関わらず、まるで数十年來の友人のようである。

唯一その会話で奇妙なのは、片方が相手に敬語しか使わないことであつた。

「さて。そろそろ俺も帰らないと」

「左様ですか」

「で、約束の品は」

「約束……って。ああっ！」

会話に気をとられてすっかり忘れていた。

今日は約束の日であり、娘を鬼の腹の中へ差し出す日だったのだ。あの時約束した際、娘なんて所詮自分が身体を痛めて生む訳でもないし、どうでも良いという気持ちから、あんな安請け合いをしてしまった。

だが今は違う。

冴えない自分の遺伝子を持ちながら、性格と容姿共によく妻に似通ってくれた娘を、簡単に鬼にやれる根性はなかった。

彼は、必死に鬼へ許しを請った。娘は今が一番大事な時期だから、大切な存在だから、どうか食べるのは勘弁してくれないかと。

その訴えに対して、鬼はしれっとした態度で聞いた後、「いいよ」と答えてくれた。

成琴の顔に、ようやく笑顔が戻る。

「じゃ、約束どおりお前を食わせていただくか」

そして、すぐに引きつった。

成琴は急いで部屋の端に逃げたが、後ろを振り向いて見れば、鬼は既に姿が見えなかった。

もしかして許してもらえたのか？ あるいは夢だったのか？ と思案しているうちに、彼は無意識に左手で髭を触り始めた。

が、どうしてか髭を触った感覚が無い。おかしいなと見てみると、左腕が丸ごとなくなっていた。

「……あああああああつ！」

大絶叫をあげて、成琴は尻餅をついた。

「左腕が、ない！ ない！ どこに落としたんだ？」

「落としたも何も」

と言いながら鬼が姿を現した。左手を社長室の書斎机に起き、右手では人間の腕を齧りながら。

「お前の腕だよ。これ」

「食われたのか……腕が、痛くないのに。うわああああつ！」

「おいおい。無いものを振ってみても無駄だよ。ほら、もう無いん

だから」

男はまた逃げようとして、今度はアゴからすっ転んだ。そして、顔をあげると鬼の姿も消えていた。

逃げなければ、でないと自分は腕どころじゃなく、全てを失うことになる。

「うううう。あれ、何故だ。前に進まないぞ」

呻きながら床を這っていると、いくら足で絨毯を這おうとしても這えないことに気づいた。

そして、右足だけ感覚が無い。

まさかと、冷や汗を滝のように流しながら、彼は自分の足を見てみた。

彼の右足は、いつの間にかゴツソリと無くなっていた。

ドンツドンツドンツドンツ！

秘書が、部屋に起こったらしい異常に気づいたのか、扉を叩く音が聞こえた。

成琴は助けを呼ぼうと口を大きく開けたが、恐怖のあまり、意味の無い呻き声をあげる羽目になった。

そんな彼の前に、自分の指の炎で煙草をつけ、それを吹かし始めた鬼が言った。

「無駄だよ。部屋の扉は俺が鍵をかけた。その時点で隔絶したから、向こうには声も聞こえんよ」

「ひいひい……うううううう」

怯えた猿のような顔と声をあげて、残った右手と左足で後退っていく彼だったが、観念したのか、急に土下座をし始めた。

「わかりました。娘は差し出します！ だから、だからもう、やめてくれえ！ やめてくれえ！ お願いですから！」

もはやそれは土下座というより、ただ頭を地面に打ち付けているだけだった。勢いが強すぎて、眉間からは血も流れている。

が、鬼は耳の穴をほじりながらしれつとした顔になると、取れた耳クソを吹きながら言った。

「今更それは無理だよ。お前の腕と足に加えて、娘さん丸々じゃあ釣り合わないじゃないかよ」

「えっ……」

「俺の力じゃ、それに釣り合う丁度良い利益を渡せないし。そんな不公平な取引は良くない。そうだろ？」

「そんな！ 頼むから、娘でカンベンしてくださいよ！」

喉が枯れて、声が掠れるほど叫んだ。

何度も何度も、許してください！ 許してください！ と続けた。だが、鬼はそれを“聞き入れること”が出来なかった。

「まあ最初に娘を渡さないといった自分を呪うんだな。俺とお前はユビキリしたんだから」

「ヒヤアアアアッ！」

子どもの金切り声のような悲鳴をあげた彼は、ベランダのある窓まで這っていき、鍵を開けた。

ここから出られれば、きっと誰かが自分の助けを呼ぶ声に気づいてくれるはず。

鍵は開き、彼はベランダの鉄格子に手をかけて、必死に一本足で起き上がると、助けを呼ぼうと大きく息を吸った。

トスッ。

誰かが自分の背中に触れる感触がしたかと思うと、彼の身体は宙に投げ出されようとしていた。

が、間一髪で彼は残った右足をベランダの鉄格子に絡み付けた。その細い柱はどんどん食い込んで、彼の足を容赦なく締め付けた。

「ああああああ……」

「諦めなよ。俺だって時間が無いんだ」

「時間がないって、どうして！」

「まさか今日が娘の誕生日とはなあ、運が悪いよお前は。俺は百鬼夜行に参加しないといけねーんだよ。遅刻したら俺が仲間に叱られる」

「たす、けて」

もはや鬼にまともな返答すら返せなつた成琴。

そんな様子に、これ以上言い合つても仕方ないと判断したらしい鬼は、また姿を消した。

ガリツガリツガリツ。

成琴の耳に、何かを齧る音がした。

彼は、必死に身体を捻り、顔を曲げてその音の原因を見た。そして、絶句した。

自分の足が、先から徐々に消えていくのが見えたのだ。

ガリツガリツガリツ。

痛みは無い……。痛みは無いのに、彼は本当に食われて激痛を感じたかのように、叫び喚き散らした。

「ごめんなさい、ごめんなさい。約束を守らなかった俺が悪かった！ 悪かったんです！ お願いです！ 公平なんてどうでもいい、だから、助けてください！」

ガリツガリツガリツ。

「そもそもあそこで、俺は蘇るべきではなかったんです！ ごめんなさい。きっとそれが気に入らないんですね？ わかりました、わかりましたから！ 対価が足りないなら、息子もつけます、妻もつけます、だから！ だから！」

ガリツガリツガリツ……。

足を齧る音が聞こえなくなつたかと思うと、彼の足がスルリと鉄格子から抜けていった。

成琴の目の前に見えたのは、会社の下に広がる無機質な駐車場だった。

自分はあるなところに顔面衝突させて死んでいくのか、とガツカリしていると、新しく前に何かが現れた。

鬼の大きな口だった。

「やめろっ、やめろおおおっ！ ぎゃあああ」  
ゴクリツ。

成琴は、鬼に丸飲みされた。

「随分と時間をくってしまったよなあ。さて、百鬼夜行には間に合うのだろうか」

腹をさすりながら、鬼はまた姿を消した。

成琴が落ちるはずだった現場には、父が落ちていく様を目撃したおかげで、「お父さん」と狂ったように叫びながらやってきた長女がいた。

だが、そこには血溜まりも、父の遺体も、何も転がっていなかった。

そして娘は、そのままそこで気絶した。

その後、この金沢成琴行方不明事件は、十年経った後も、日本における未解決神隠し事件として、代表的なものとして残っている。

事件の手がかりは、遺体も、遺品も、十年経った後でも、何一つとしてあがっていない。

ただ一つ、絨毯のうえに残っていた微量の血痕と、抜け落ちた金沢成琴の毛髪を除いて。

（後書き）

五〇作品記念として書こうとしてたら、どうにも流れがまとまらず、結局後に回ってしまった作品。これもどちらかといえばファンタジーに気がするんですが、怖くないだろうけどホラーを狙ったので一応ホラーに。中途半端なプライドでした。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7937e/>

---

鬼とユビキリ

2010年10月8日14時45分発行